

## 教職実践演習のカリキュラム開発と試行<sup>†</sup>

姫野 完治・石橋 研一・神居 隆・斎藤 孝\*

秋田大学教育文化学部

教員免許取得に必要な必修科目として、2010年度の入学者より「教職実践演習」が加わった。同科目を教職課程における学びの軌跡の集大成として大学4年次に位置付け、ロールプレイや模擬授業等を行うことを通して、教員として必要最小限の資質能力を確実に保証することが求められている。本研究では、教職実践演習のカリキュラムを開発するとともに、2010年度の4年次と大学院生19名を対象として試行した。その結果、カリキュラムには一定の評価を得られた一方で、3年後の本格実施に向けた課題も明らかになった。

**キーワード：**教職実践演習、教員養成、スタンダード、教師の成長、履修カルテ

### 1. はじめに

#### 1.1 教育現場の実際と教員養成の役割

昨今の学校教育をめぐる状況は、目まぐるしく変化し、それに伴い教員の役割や責任はますます増加してきている。新しい学習指導要領へと移行することにより、小学校では2011年度より外国語活動がスタートする。もともと外国語力を求められていない小学校教員にも、ALT (Assistant Language Teacher) と協力して授業を作ることが求められる。2007年度より行われている学力・学習状況調査の結果をふまえ、都道府県および市町村の教育委員会、そして各学校は、子どもの活用力をいかに育むかに躍起になっている。子どもの学力向上は教師の本務であるが、とりわけ小学校5年生と中学校2年生の担任が、翌年の学力調査を見据えてテスト対策に追われている状況は、異様な感じさえる。

この他にも、子どもの生活習慣を向上させるべく、箸の持ち方などの食事マナーの指導を行ったり、朝ごはんを学校が提供する学校まで現れている。教師の仕事は、「ここまでやればよい」という一定の基

準がないために、どこまでも終点がない性質を持っており、仕事は限りなく増加していく。家庭や地域からの要望が、小野田(2006)が指摘するようなイチャモン(無理難題要求)へとエスカレートし、それにより精神疾患で休職する教員も増えている。それにも関わらず、社会や保護者からの学校・教師への視線は厳しい。なかでも、初任教師には特別のプレッシャーがかかっている。

どのような仕事に就く場合も、1年目は仕事に慣れず、プレッシャーを感じるのは無理もない。しかし、教職の場合は他の職業とは異なる性質がある。多くの職業に就く場合、どのような経歴や学歴があろうと、新しい職場で研修を受け、先輩のアシスタントなどを担うなど、独り立ちするまでに一定の期間を設ける。ところが教職の場合は、大学を卒業し4月1日に学校へ赴任すると、数日後の始業式からは、他の教員と同様に学級担任や部活動の顧問を任されたり、校務分掌を担うなど、ベテラン教師とほぼ同等の仕事が任される。しかも、最近ではそのレベルも同等のものが求められるようになっている。かつてであれば、学校現場に出てから先輩教師から学ぶ文化が備わっていた。保護者にも、初任教師の若さに期待し、温かく見守る余裕があった。しかし、社会全体に「待つ余裕」がなくなり、教員自体も多忙化により疲弊している中で、保護者や同僚、

2011年2月14日受理

<sup>†</sup>A Study of Curriculum Development and Test of Practical Seminar for Teaching-job

\*Kanji HIMENO, Kenichi ISHIBASHI, Takashi KAMII and Takashi SAITO, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

子どもから初任教師に向けられるまなざしは厳しさを増している。一年目で辞める初任教師数は、近年になって増加し、2008年度は315人にも及んでいる(久富2010)。教師の成長・発達を、教員養成から現職教育を通して生涯にわたると捉えることは一般的になっているが、教員養成と教職の実際とのギャップは大きく、初任教師を支えるための手立てが必要と言える。

ところで、教員養成から現職教育への移行を緩やかにするための施策として初任者研修がある。1986年の臨時教育審議会の第2次答申においてはじめて提言され、1989年から順次導入された。教職に就いてから一年間、校内研修と校外研修を通じて、実践的指導力、幅広い視野と見識、教職の基本的な資質や能力を習得することが望まれている。しかし、学級・教科の担任と並行して研修を受けることの難しさや、採用当初から必要な教師の服務等を、5月下旬以降の校外研修で学ぶという問題もあげられている(姫野2002)。教員養成と現職教育のそれぞれのカリキュラムを考察するとともに、その接点をいかに連続するかが重要な課題である。

## 1.2 教職実践演習の設置と対応

採用当初から多様な教育課題に対処し、子どもの生きる力を育む義務教育を担う教員を学校現場に送り出すためには、教員養成の役割が非常に大きい。2006年に発表された中央教育審議会答申「今後の教員養成、免許制度のあり方について」において、教員としての最小限必要な資質能力を確実に身につけさせるために、教員免許取得の必修科目として新たに教職実践演習(仮称)の設置が提言された。改正された教員免許法施行規則は、2010年4月1日より施行され、教職実践演習を含む新しい教職課程がスタートしている。

この教職実践演習については、4年次の後期に授業を行うこと、ロールプレイや意見交換、模擬授業を取り入れること、運営体制を整備すること等が定められており、教職課程を持つ各大学・学部はその対応に追われている。教職実践演習を推進していく上での要点は3つある。

1つは、同科目の受講時期と科目の位置付けについてである。教職実践演習は、他の教職科目を全て取り終え、卒業が見込まれる4年次の後期に受講することが定められている。これにより、教員養成大学・学部が卒業生の資質能力を保障することを可能

にしているのである。教員免許の取得を卒業要件とする教員養成課程では、同科目を取りこぼすと卒業延期に直結することになる。すなわち、同科目が教職課程、そして大学の卒業試験としての意味合いを持つことになる。そのため、教員採用試験に合格していながらも、教職実践演習を取りこぼしたために卒業延期となる場合も想定される。とすると、教員免許の取得には不適格だが、教員として勤務することは認められるという矛盾した状況が生まれる。教職実践演習の評価基準や規準によっては、過度な教職課程の統制にもつながることから、そのバランスをいかにとるかが重要となる。

2つは、教職カルテをいかに設けるかである。教職実践演習では、授業自体は4年次の後期に行うものの、入学時から3年半の積み重ねが要求される。具体的には、課程認定委員会から2008年10月に出された「教職実践演習の実施にあたっての留意事項」で示されたように、入学の段階から個々の学生の教職関連科目の履修状況、理解度等を担当教員や学生が記入したり、資質能力を評価する「履修カルテ」を設けなければならない。まさに医者が記入する「カルテ」のように、理想の教師像に照らして、学生の現状を診断し、適切な処方箋を出し、その上で4年次後期の教職実践演習で総仕上げを行うことが求められているのだ。そこで問題となるのが、大学教員はどのような情報をもとに学生の資質や力量を診断し、処方を行うのかである。この履修カルテは2010年度の入学者から求められるため、多くの大学・学部がシステム開発に着手しているが、それを4年後の教職実践演習にどのようにつなげるか、評価とどのように関連付けるかなど未確定な部分も多い。

3つは、教職実践演習のカリキュラム開発と運営体制の確立である。授業の本格実施は、2010年度の入学者が4年次になる2014年であるが、それまでの今後3年間で試行を重ねてカリキュラムを精緻化しなければならない。授業には、ロールプレイや事例研究、模擬授業等を取り入れる必要があり、一斉指導で行うことは不可能である。少人数グループなどに分けて指導を行う場合、校種や教科ごとにグループ編成を行った方がよい場合もあれば、むしろ校種や教科が異なる学生でグループを設けた方がよい場合もある。教員免許を取得するにふさわしい資質能力を免許取得者全員に保障するためのカリキュラムを開発するとともに、授業形態等の具体的な方法を

検討していかなければならないだろう。また、教職専門教員と教科専門教員がいかに連携して授業を運営するのか、といった授業の運営体制の整備も難しい問題である。

### 1.3 本研究の目的

本研究では、先行研究などを参考にしながら教職実践演習のカリキュラムを開発するとともに、2010年度の4年次と大学院生19名を対象として試行し、成果と課題を明らかにすることを目的とする。

## 2 教職実践演習のカリキュラム開発

### 2.1 教職実践演習に求められる内容と他大学の事例

中央教育審議会答申（2006）によると、教職実践演習には、教員として求められる以下の4事項を含めることが適当とされている。

①使命感や責任感、教育的愛情に関する事項

②社会性や対人関係能力に関する事項

③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項

④教科・保育内容等の指導力に関する事項

また、その授業方法については、講義だけではなく、グループ討論や役割演技（ロールプレイング）、事例研究、現地調査（フィールドワーク）、模擬授業等を積極的に取り入れること等が提言されている。

ここで、他大学で試行的に行われている教職実践演習のカリキュラムを整理する（各授業の内容を表1に示す）。

#### (1) 弘前大学のカリキュラム

大谷ら（2005）は、学生40名、大学院生5名を対象として、教員養成総合実践演習のカリキュラムを開発し、学校サポーター活動との往還による授業を試行・検証している。授業は前期に毎週1回行われ、短編の授業記録を分析したり、学生グループが現代

表1 各大学の教職実践演習カリキュラム

回	弘前大学	鹿児島大学	岡山大学
1	説明、事前調査	オリエンテーション 事前の自己診断	教職実践演習の目的・意義・授業運営の説明
2	学級びらき、教員採用試験について	現代の教師に求められる資質能力、 学校組織	教職実践ポートフォリオに基づく自己評価・相互評価
3	短編実践記録の分析1、現代的教育課題の取り組みについて	小論文作成及び意見交換	自己評価に基づく自己教育課題の認識
4	短編実践記録の分析2	社会人としての在り方及びマナー、 服務規律	フィールドワークをもとにした発表（学習指導）
5	現代的教育課題のグループ準備1	保護者の相談への対応、クレームへの対応	学習指導に関する自己教育課題に基づく授業設計
6	実践講和、授業を通して子どもを見る	学習指導とその評価、学習指導案作成の方法	学習指導案の検討
7	現代的教育課題のグループ準備2	心に届く生徒指導、担任の実務	学習指導案に基づく模擬授業
8	教育課題研究発表：現代の子どもに見合った生徒指導	模擬授業	育てたい子ども像と学級経営案の作成・検討
9	教育課題研究発表：子どもを取り巻く人々との関係づくり	学校参観（附属小中）	生徒指導の在り方（ケーススタディ）
10	教育課題研究発表：個性と校則について－茶髪の生徒	学校参観の感想をもとに授業における指導の在り方を協議	フィールドワークをもとにした発表（生徒指導）
11	教育課題研究発表：LD・ADHD児への指導	実践場面を想定した課題を設定し解決の方策を検討	学校組織における教員
12	教育課題研究発表：開かれた学校－情報公開	研究討議・発表準備及びシミュレーション	学校と家庭・保護者及び地域との連携
13	実習の目的と方法	教育相談・カウンセリングマインド	他校種との連携
14	調査「小論文」	研究発表・意見交換、事後の自己診断	フィールドワークをもとにした発表（マネジメント）
15	学級じまい 調査（授業評価）		教職実践ポートフォリオに基づく最終的自己評価

的教育課題について検討し発表する内容で構成されている。学校サポーター活動と連動しているため、学生たちは実践演習以外に学校で実践経験を積んでいる。そのため、実践演習のカリキュラム自体に学校参観や授業参観等の内容は含んでいない。授業後のアンケートでは、学校サポーター活動が教師力養成に役立ったかという項目で90%以上、現代的教育課題の発表を聞いて問題意識が深まったかという項目で85%以上が肯定的に評価しており、概ね成果をあげている。

## (2) 鹿児島大学のカリキュラム

田宮・下野(2008)は、教育学部以外の学生23名を対象として授業を行い、その成果と課題を報告している。そこでは、講義や意見交換、ロールプレイング、模擬授業等の多様な授業方法を用い、また小論文を書く機会や学習指導案を作成する機会を取り入れている。学校参観の機会は、附属小学校もしくは附属中学校であり、公立学校を参観する機会は取り入れている。教員として求められている4項目について、授業の前後に学生に自己評価させたところ、「③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項」と「④教科・保育内容等の指導力に関する事項」が向上していることが指摘されている。その一方で、学生の力量を教員が明確に評価する基準づくりを今後の課題としてあげている。

## (3) 岡山大学のカリキュラム

岡山大学では、学習指導力、生徒指導力、コーディネート力、マネジメント力の4つの教育実践力をバランスよく身につけることを目指し、教職実践演習を頂点とする積み上げ方式でのカリキュラムを構築している。教職実践演習のカリキュラムは通年で構想されており、教育現場でのフィールドワークと大学でのグループワークを行き来するものとなっている。

これらの先行事例を見ると、取り上げている内容にそれほど大きな違いはないが、学校訪問の位置付けや回数、半期か通年かといった授業期間、学生が省察する方法などに違いがみられた。各大学が設けているスタンダードや全体のカリキュラムとの関連を考慮しながら、教職課程の最後に位置付ける科目としてのカリキュラムを検討していく必要があるだろう。

## 2.2 教員養成カリキュラムと教職実践演習

教職実践演習のカリキュラムを検討する上で、まずは秋田大学における教員スタンダードおよび教育

実習の位置付けを明確にしておきたい。本学では、表2のような教員スタンダードを設け、教員養成課程4年間で教員としての最小限必要な資質能力を確実に保証する教員養成を目指している。具体的には、学生が大学4年間にわたって教育実践経験を積むことを可能にし、大学1年次に附属学校園を訪問する[教職導入ゼミ]、2年次に[主免Ⅰ期教育実習(附属学校・3週間)]、3年次に[主免Ⅱ期教育実習(公立学校・2週間)]、4年次に[副免教育実習]を位置づけている(図1)。これにより、教員養成4年間の中で理論と実践に触れる機会を並行して提供し、両者の往還運動の中で、教師としての資質・力量を高めようとしている。このような教員養成課程の現状をふまえ、また他大学における先行事例を参考にして、本学における教職実践演習のカリキュラムを設けた。2010年度の試行カリキュラムを表3に示す。

授業は筆者ら4名と外部講師が担当し、後期の水曜りと土曜日に開講した。水曜日1コマと土曜日2コマで実施した背景には、外部講師を招く際に休日の方が適当であったこと、卒業研究を行う上で12月以降になると学生の負担が大きくなること、仮に同単位を取りこぼした学生が再度受講できる時間的余裕を設けたかったこと、2コマ続きの授業の方が演習に深まりを出すことができる等である。通年にすることも検討されたが、教員採用試験の時期、副免教育実習が9月～11月に行われていること、教職以外の就職活動を行う学生もいることを考えると、現実的に困難であると判断した。

表2 秋田大学の教員スタンダード(簡略版)

(1)専門職としての自覚と責任感 ①専門職としての強い使命感 ②確固たる倫理観と心身の健康 ③実践の省察と教育力の向上
(2)授業づくりと豊かな学びの創造 ④子どもと地域に対応した教育目標の構想 ⑤教育内容・教材に対する深い理解 ⑥効果的な指導法と授業デザイン
(3)子どもへの共感的理解と学級づくり ⑦子どもと子ども集団の理解と指導 ⑧個と集団のバランスの取れた学級経営 ⑨子どもの個性の伸長と自立心の育成
(4)教職員の協働性と開かれた学校づくり ⑩積極的なコミュニケーション能力 ⑪教職員の協働と学校経営への参画 ⑫家庭、地域社会との連携

図1 秋田大学における教育実践科目の位置づけ

	前 期	後 期	
4 年	副免教育実習 (幼・小・中・特) 附属・2 週間	教職実践演習	学校ボランティア
3 年	事前指導Ⅱ	主免Ⅱ期教育実習 公立・2 週間	
2 年	事前指導Ⅰ	主免Ⅰ期教育実習 附属・3 週間	
1 年	教職導入ゼミ 附属・2 日間		
			介護等 体験

授業内容は、中央教育審議会の答申（2006）に基づきながら、既述した先行研究を始め、教員採用試験に合格した学生と現職教師を対象として、採用前研修のあり方を調査した姫野（2002）による研究を参考にした。1コマ90分の授業のタイムスケジュールは、オリエンテーション5分、講義30分、演習30分、交流20分、振り返り5分を目安とした。

一日実習は、各学生が主免Ⅱ期実習（3年次）を行った公立学校で行うこととした。本来であれば、先述した弘前大学のように、学校ボランティアなどと連動したカリキュラムにすることが望ましいのかもしれない。しかし、3年次に主免実習、4年次に応用実習を行う弘前大学と比べ、本学では2年次と3年次に主免実習、4年次に副免実習があり、毎年のように教育実践経験を積む機会を提供している。そのため、教職実践演習でさらに経験を積むことよりも、実習から1年後の子どもと触れ合い、その成長や学級集団の様子を観察することの方が、過度な負担を防ぐとともに学習効果が高いと判断した。学生が実習を行った学級に配属することを基本としながら、学級が解体している場合や児童生徒が卒業している場合、担任が転任した場合は、状況に合わせて配属校や学級を調整した。また実習の日程は、学生自身が学校と交渉し決定することとした。

### 3. 教職実践演習の試行と評価

#### 3.1 試行の概要と実践演習への要望

2010年度の4年次16名、大学院2年次3名の計19名を対象として授業を行った。授業開始に先立って、「教職実践演習で身につけたい内容」として9項目を提示し、そのうちの上位3項目を回答してもらった（表4に示す）。その結果、9割近くの学生が「2学級経営」、半数以上が「8 保護者への対応力」を身

につけたいと考えていることが分かった。また、「授業に期待していることや要望」を自由記述で尋ねたところ、「実践力を身につけたい(4)」、「学級担任としての学級経営(3)」、「外部講師との情報交換(3)」、「教科指導(2)」が上位にあげられた。

秋田大学教員スタンダード12項目（項目の詳細については、表2を参照のこと）に対して、4段階で自己評価をしてもらった。各々の評価を得点化した結果を図2に示す。その結果、①専門職としての強い使命感（2.74）や⑩積極的なコミュニケーション能力（2.74）、②確固たる倫理観と心身の健康（2.58）の項目は自己評価が高かったが、その他の項目については軒並み低評価であった。特に、⑧個と集団のバランスのとれた学級経営（1.68）や⑫家庭、地域社会との連携（1.68）などは、授業前の段階ではあまり自信がないことが分かった。その理由の一つとしては、教育実習では関わりにくいことが考えられる。ただし、教職科目や教育実習でも経験しているはずの⑤教育内容・教材に対する深い理解（1.79）や⑥効果的な指導法と授業デザイン（1.74）の項目についても低評価であったことから、教職課程や教育実習での経験が、必ずしも自己評価の向上につながっていないことも分かった。

#### 3.2 授業の評価と学生の学び

試行した教職実践演習を評価すべく、ここでは記名調査と匿名調査の二つの方法を用いる。

##### (1) 各回の授業で学んだこと（記名調査）

毎回の授業時に、授業を通して学んだこと・考えたこと・感想等を記入してもらった。学生による記述を整理したものを表5に示す。「新たに学んだ」「実感した」など、学生にとって大きな学びとなっていることが読み取れる。教職実践演習の内容は、教育現場に即した内容を中心としているが、必ずしも教

表3 秋田大学における教職実践演習（2010年度試行）カリキュラム

回	日にち	内 容	外部講師等	主なねらい			
				①	②	③	④
1	11/10（水） 16：10～17：40	【オリエンテーション】 <input type="checkbox"/> 講義：私の教員一年目 <input type="checkbox"/> 演習：教師の仕事について、初任者研修の内容、初任者として心がけること、自己評価	<input type="checkbox"/> 鈴木健之（秋田市立旭川小学校教諭） <input type="checkbox"/> 佐々木朋子（秋田県立栗田養護学校教諭）	○			
2	11/13（土） 9：20～10：50	【学校における1年間の営み】 <input type="checkbox"/> 講義：学校における一年間の歩み <input type="checkbox"/> 演習：学級目標の設定、学級経営目標と手手立て、担任として目指したい学級づくり	<input type="checkbox"/> 佐川真知子（秋田大学教育文化学部附属小学校教頭）		○	○	
3	11/13（土） 11：00～12：30	【安全な学校であるために】 <input type="checkbox"/> 講義：安全な学校であるために <input type="checkbox"/> 演習：学校生活の中で危険を感じたこと、危機管理、保護者や地域との連携	<input type="checkbox"/> 真壁聡子（秋田県教育庁高校教育課副主幹）	○		○	○
4	11/17（水） 16：10～17：40	【「困っている子」への支援のポイント】 <input type="checkbox"/> 講義：困っている子への支援のポイント <input type="checkbox"/> 演習：学習面・行動面・対人関係のケース、子ども一人ひとりへの丁寧な支援	<input type="checkbox"/> 佐藤圭吾（秋田県立栗田養護学校教育専門監）	○	○	○	○
5	11/24（水） 16：10～17：40	【担任が扱う文書や通信など】 <input type="checkbox"/> 講義：指導要録/通知表/学級通信等について <input type="checkbox"/> 演習：学級通信の作成と留意点、子ども理解と記録方法	<input type="checkbox"/> 鎌田純子・小松正子・庄司伸子（秋田大学大学院 現職派遣）	○	○	○	○
6	11/27（土） 9：20～10：50	【保護者との上手な付き合い方】 <input type="checkbox"/> 講義：保護者との上手なかかわり方について <input type="checkbox"/> 演習：3つのケースについてロールプレイ、授業参観や学級懇談、家庭訪問における留意点	<input type="checkbox"/> 太田徹（前秋田市立明德小学校校長）	○			○
7	11/27（土） 11：00～12：30	【他の教員との協力・連携の在り方】 <input type="checkbox"/> 講義：学校の仕事とその流れ <input type="checkbox"/> 演習：学校活性化に向けた取り組み、教員間の連携・協力の仕方	<input type="checkbox"/> 北林強（秋田県総合教育センター教育専門監）	○	○		○
8 11	11/25～12/7	【一日実習】 <input type="checkbox"/> 学校での教科指導・学級指導の実際 <input type="checkbox"/> 実習校における実習		○	○	○	○
12	12/8（水） 16：10～17：40	【学校での教育実践を振り返って】 <input type="checkbox"/> 一日実習で印象に残ったこと <input type="checkbox"/> 4月の採用までに心がけたいこと、発達障害児に対する支援員や保護者との連携方法			○	○	
13	12/11（土） 9：20～10：50	【いじめ・不登校への対応】 <input type="checkbox"/> 講義：スペース・イオにおける取組について <input type="checkbox"/> 演習：不登校の子どもへの対応について、予防と対策、学級担任・学校の役割	<input type="checkbox"/> 新目敏子（秋田県立明德館高等学校教育専門監）	○		○	○
14	12/11（土） 11：00～12：30	【子ども理解と教育相談の在り方】 <input type="checkbox"/> 講義：自傷行為の背景理解 <input type="checkbox"/> 演習：リフトカットに関する事例検討、担任としての支援の在り方	<input type="checkbox"/> 北島正人（秋田大学教育文化学部講師）			○	○
15	12/15（水） 16：10～17：40	【素敵な教員になるために】 <input type="checkbox"/> 講義：素敵な教員になるために <input type="checkbox"/> 演習：教職実践演習を振り返って、自己評価、教職実践演習の授業評価と改善策	<input type="checkbox"/> 関谷美佳子（秋田県教育庁義務教育課主任指導主事）	○			
主なねらいを主眼とする授業の回数				9	6	8	8

※主なねらいは、教職実践演習に含めるべき以下の事項に相当している

- ①使命感や責任感、教育的愛情に関する事項      ②社会性や対人関係能力に関する事項  
 ③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項      ④教科・保育内容等の指導力に関する事項

表4 実践演習で身につけたい内容について（事前）

	内 容	選択率
1	教科の指導力	42.1%
2	学級経営	89.5%
3	生徒指導	31.6%
4	児童生徒理解	42.1%
5	特別支援への対応	21.1%
6	特別活動	0%
7	学校事故等への対応	15.8%
8	保護者等への対応	52.6%
9	その他	0%

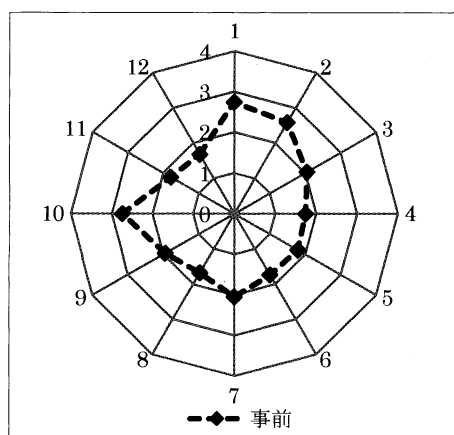


図2 教員スタンダードに対する自己評価（事前）

職課程で扱っていない内容ばかりではない。ただし、これまでの教職課程と異なり、複合的な内容について多面的に検討するよう心がけた。すなわち、大学における教職課程で学ぶ内容は、例えば教育心理や生徒指導、教科教育法のように、分野によって分けられている。しかし、教育現場ではそれらが複雑に絡み合い、教師はその現実に対して瞬時に状況を理解し、また意思決定することが求められる。教職実践演習という科目は、学校教育における総合的な学習の時間のように、教職課程を横断的に扱うことができることから、教育現場に即して学生の学びを統合することが可能となる。各々の教職・教科の授業のカリキュラムマップをさらに検討し、学生の学びをいかに統合していくかといった視点から再度カリキュラムを検討していきたい。

教員スタンダード12項目について、事後に再度自己評価してもらった。結果を図3に示す。全ての項目について、事前調査と比べて数値が向上してお

表5 各授業において学習したこと

回	学んだこと・考えたこと・感想等
1	・教師になる上での心構えを学んだ ・教職への不安もあるが楽しみも増えた ・漠然とした不安が明確になり自分の課題が見えた
2	・学校の一年間の流れがわかりイメージがわいた ・子どもに成長してほしい方向性を自分なりに考えねば ・先を見通して行動することの大切さがわかった
3	・危機管理や瞬時の判断など日ごろから意識しなければ ・予防や予知、教師間・地域との連携が重要と感じた ・子ども/保護者/地域が安心感を持てる学校づくりが大切
4	・まず自らが正しい知識を持つことが大事だと思った ・事前に情報に捉われ過ぎず子どもを理解しようと思う ・個別の指導計画を作るなど、具体的な支援方法を知った
5	・保護者の方に伝えるための方法を考えなければ ・子どもの様子を良く観察し記録しておくことが大切だ ・指導要録も学級通信も普段からの子どもの見取りが重要
6	・「じっくり/ゆっくり/丁寧に」を心がけたい ・保護者との信頼関係を築くことを最優先に考えたい ・保護者対応のロールプレイでは即座の対応が難しかった
7	・子どものことを第一に考えて仲間と話し合いをしたい ・教職はチームワークで成立する職業だと実感した ・学校という組織の中でいかに目的を共有するかが大切
8	・実習と比べて子どもやクラスを見る視点が変わった ・一年ぶりに子どもや学級の成長した姿を見て驚いた ・自分も4月から担任になるという実感がわいた
12	・交流することで新しい見方で見ることができた ・4月までに意識していきたいポイントが明確になった ・特別支援を必要とする子どもが想像以上に多いと知った
13	・子どもの自己肯定感を高める声かけやかかわりが大切 ・不登校やいじめに対しては長期的な支援を考えたい ・デリケートな問題なので子どもの気持ちに寄り添いたい
14	・子どもからのサインを見逃さないように敏感になりたい ・自傷行為などの背景が複雑であることが分かった ・複数の視点で状況を把握し本人の気持ちを受け止めたい
15	・教職への責任や自覚を持って取り組まなければと思った ・一生懸命、素直、謙虚な気持ちで4月から臨みたい ・教職だけではなく人としての向上心を持ち続けたい

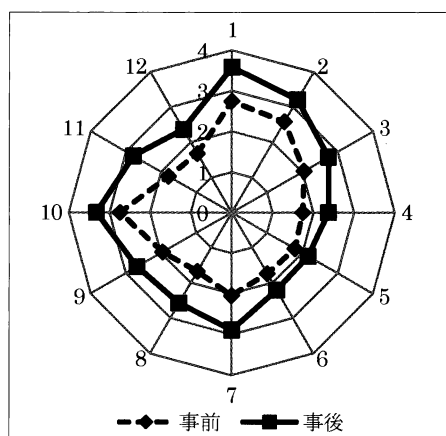


図3 教員スタンダードに対する自己評価（事前・事後）

表6 教職実践演習に対する授業評価

		とても思う	やや思う	どちらでもない	あまり思わない	全く思わない
1	授業目標を理解する上でシラバスの記載は有効でしたか	22.2	27.8	44.4	5.6	0
2	説明はわかりやすいものでしたか	72.2	22.2	5.6	0	0
3	学生の理解度を高めるために工夫されていましたか	61.1	38.9	0	0	0
4	授業の評価に関して明確な基準が提示されていましたか	27.8	33.3	16.7	22.2	0
5	シラバスの到達目標を身につけられたと思いますか	11.1	61.1	27.8	0	0
6	授業にはきちんと出席しましたか	66.7	22.2	11.1	0	0
7	授業を理解するために授業外に予習・復習をしましたか	5.6	22.2	44.4	27.8	0
8	この授業への取り組みは積極的だったと思いますか	77.8	16.7	5.6	0	0

り、試行したカリキュラムが一定の成果をあげたと評価できる。最も数値に高まりがみられたのが、⑪教職員の協働と学校経営への参画、次に⑧個と集団のバランスのとれた学級経営であった。試行したカリキュラムでは、一年間の学校のスケジュールや学校・学級経営などを重視してきた。教育実習で触れることのないこれらについて、現職教師から直接話を聞いたり、ロールプレイやグループ討議を行うことを通して、多少なりとも自信が出てきたと考えられる。一方、数値の高まりが低い項目として、⑤教育内容・教材に対する深い理解、⑥効果的な指導法と授業デザインがある。15回の授業の中で、教科指導について全く扱っていないわけではない。ただ、特定の教材を研究したり模擬授業をしたりしたわけではなく、授業中の困っている子どもへの対応、通知表や指導要録の評価・子ども理解の方法など、複合的な学習指導を中心に扱った。教職科目や教育実習で扱ったはずのことを、どのようにして教職実践演習に取り入れていくかを今後検討してかなければならない。

## (2) 授業アンケート（匿名）

授業後に、FDの一環として実施されている授業アンケート（匿名）を行った。結果を表6に示す。「2 説明はわかりやすいものでしたか」や「3 学生の理解度を高めるために工夫されていました」といった項目に対しては、9割以上の学生から肯定的な評価を得ている反面で、「4 授業の評価に関して明確な基準が提示されていましたか」という項目では、2割以上が否定的に回答していた。今回は試行ということもあり、現4年次や大学院生向けのシラバスが正式に整備できていなかったため、授業の初回に内容を示したのだが、評価基準が明確とは言えな

かったようだ。また、「7 授業を理解するために授業外に予習・復習をしましたか」という項目については、「とても思う」「やや思う」と回答した学生が3割にも達していない状況から、学生による自律的な学習を促進するための手立てを講じる必要があることが分かった。

また、授業アンケートの自由記述欄を整理したものを表7に示す。課題としてあげられたのは、時期の問題と一日実習に関する位置付けや学校へのアポイントメントの方法であった。時期については、3年後の本格実施に向けて、さらに協議していかなければならない。一日実習については、位置付けを学生達に明確に示すことは必要だろう。アポイントメントについては、こちらから全てお膳立てをすることもできるが、それでは教職実践演習としての目的と離れてしまう。⑩積極的なコミュニケーション能力を育むためにも、自律的に行動できるよう支援するバックアップ体制を整備する必要があるだろう。

表7 教職実践演習への要望（事後）

- ・4月に教員になることに向けて意識を高めることができた
- ・様々な先生の話聞いて、教職について前向きに捉えることができたようになった
- ・一日実習のアポイントメントの方法を統一してほしい
- ・土曜日にあるのは正直辛かった。12月の時期は大変。
- ・現職の先生、教育委員会の方から話を聞けて良かった
- ・社会に出た時に役立つことが多く積極的に参加できた
- ・受講者の意識次第で大きく変わると思う
- ・グループで協議をすることで考えが深まってよかった

#### 4. おわりに

本研究では、教職実践演習のカリキュラムを開発するとともに、2010年度の4年次と大学院生19名を対象として試行した。学生の自己評価や授業アンケートをもとにカリキュラムを評価したところ、学校教育における総合的な学習の時間のように、教職課程を横断的に扱うことができることから、教育現場に即して学生の学びを統合することが可能となるなど、一定の成果を得られた。その一方で、教育内容・教材に関する内容や効果的な指導方法に関する内容は、不十分であることが分かった。教職実践演習以外の授業科目や教育実習の既習内容を、どこまで盛り込む必要があるのかについて今後検討していく必要があるだろう。

教職実践演習は必修科目であるため、教員免許を取得する学生は誰もが修得しなければならない。しかし、教員免許の取得を希望する学生全員が教職に就くわけではない。4年次後期ともなれば、一般企業や教職以外の公務員等への就職が決まっている学生もいる。今回試行した授業は、あくまでも選択科目としての位置付けであり、教職への意識が高い学生を対象としている。もちろん、教員免許を取得するにふさわしい資質能力を免許取得者全員に保障することは大学の責務であるが、とりわけ教員養成課程の学生にとっては卒業に直結するだけに難しい問題である。来年度以降は教職以外の進路を選択した学生も含めた100名以上の受講生を想定して教職実践演習を試行していきたい。また、教員スタンダードやカリキュラムマップとの整合性、評価基準と規準の明確化に取り組んでいきたい。

#### 【謝辞】

教職実践演習の試行にご協力いただいた13名の外部講師の先生方、参加した学生のみなさんに心から感謝いたします。

#### 【参考・引用文献】

- 中央教育審議会（2005）今後の教員養成・免許制度の在り方について（中間報告）  
 中央教育審議会（2006）今後の教員養成・免許制度の在り方について（最終答申）  
 久富善之・佐藤 博（2010）新採教師はなぜ追い詰められたのか、高文研  
 姫野完治（2002）教師教育における「採用前研修」

に対する学生と現職教師の意識, 教育方法学研究, 28巻, pp.175-186

姫野完治（2010）段階的教育実習による教職志望学生の成長観の変容, 秋田大学教育実践研究紀要, 第32巻, pp.153-165

姫野完治（2010）教職実践演習を支援する教職ポートフォリオ・カルテシステムの開発と評価, 日本教育工学会第26回大会講演論文集, pp.613-614

岡山大学教育学部（2010）教職実践ポートフォリオ（第2版）

小野田正利（2006）悲鳴をあげる学校, 旬報社

大谷良光・平井順治・福島裕敏（2006）新科目「教員養成総合実践演習」と学校サポーター活動の往還により教師力を養成する試み, 教員養成学研究, 第2号, pp.35-44

斉藤 周・佐藤浩一・山崎雄介・江森英世・益田裕光（2010）「教職実践演習」試行の報告と本実施に向けて, 群馬大学教育実践研究, 第27号, pp.255-261

高橋 望（2008）教員養成制度改革に関する一考察, 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 第57集・第1号, 87-101

田宮弘宣・下野浩二（2008）教育学部以外の学生を対象とした「教職実践演習（仮称）」の試行, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 第18巻, pp.210-219

宇佐見忠雄（2010）新設・必修科目「教職実践演習」の探求, 実践女子大学文学部紀要 第52集, pp.34-47

山田丈美（2009）教職実践演習における言語的实践, 中部学院大学・中部学院短期大学部 研究紀要, 第10号, pp.123-131

#### Summary

The licensing law for the teaching staff at schools has been revised as of the academic year of 2010 applicable to students entering a university in and after that year, as a result of which a practical seminar for teaching-job has been introduced as a mandatory course for those who seek a teaching license. It is necessary bring up to humanity and ability for become school teacher through the role-playing and lesson study in teacher-training course.

This paper is a report on the class of curriculum

developed and tested, on behalf of some 19 fourth-year and graduate students. As a result, the problem for the real execution after three years was clarified to the curriculum while a constant evaluation had been obtained.

**Key Words :** PRACTICAL SEMINAR FOR  
TEACHING-JOB,  
TEACHER TRAINING,  
STANDARD,  
TEACHER'S GROWTH,  
CLINICAL RECORDS AND  
ASSESSMENTS OF STUDENT  
TEACHER'S LEARNING

(Received February 14, 2011)